

金時計

泉鏡花

青空文庫

上

広告

一 拙者昨夕散步の際此辺一町以内の草の中に金時計一個遺失致し候間御拾取の上御届け下され候御方へは御礼として金百円呈上可仕候

月 日

あーさー、へいげん

これ相州西鎌倉長谷村の片辺に壯麗なる西洋館の門前に、今朝より建てる広告標なり。時は三伏盛夏の候、聚り読む者堵のごとし。

へいげんというは東京……学校の御雇講師にて、富豪をもって聞ゆる——西洋人なるが、毎年この別荘に暑を避くるを常とせり。

館内には横浜風を粧う日本の美婦人あり。蓋し神州の臣民にして情を醜虜に鬻ぐもの、俗に洋妾と称うるはこれなり。道を行くに愧る色無く、人に遭えば、傲然として意気頗る昂る。昨夕へいげんと両々手を携えて門前を逍遙し、家に帰りて後、始めて秘蔵せし瑞西製の金時計を遺失せしを識りぬ。警察に訴えて搜索を請わんか、可は

すなわち可なり。しかれども懸賞して細民を賑わすにしかずと、一片の慈悲心に困りて事ここに及べるなり、と飯炊に雇われたる束髪のお婦人、人に向いて喋々その顛末を説けり。

渠は曰く、「だから西洋人は難有いよ。」

懸賞金百円の沙汰即日四方に喧伝して、土地の男女老若を問わず、我先にこの財を獲んと競い起ち、手に手に鎌を取りて、へいげん門外の雑草を刈り始めぬ。

まことや金一百円、一銭銅貨一万枚は、これ等の細民が三四年間粒々辛苦の所得なるを、万一咄嗟にこの大金を獲ば、蓋し異数の僥倖にして、坐して半生を暮し得べし。誰か手を懐にして傍観せんや。

翌日はとみに十人を加え、その翌日、またその翌日、次第に人を増して、遂に百をもつて数うるに到れり。渠等が炎熱を冒して、流汗面に被り、氣息奄々として労役せる頃、高樓の窓半ば開きて、へいげん帷を掲げて白皙の面を露し、微笑を含みて見物せり。

かくて日を重ねて、一町四方の雑草は悉く刈り尽し、赤土露出すれども、金時計は影もあらず。

草刈等はなお倦まず、怠らず、撓まず、ここかしこと索れども、金属は釘の折、鉄葉の

片はしもあらざりき。

一家いっけを挙げ、親族を尽し、腰弁当を提げて、早朝より晩夜まで、幾日間炎天に脳汁を煮にられて、徒汗むだあせを掻かきたる輩ともがらは、血眼ちまなこになりぬ。失望してほとんど狂せんとせり。

されど毫ごうも疑うたがわざりき。渠等みちらはへいげん君の富かつ貴たつときを信たずればなり。

渠等が労役の最後の日、天油ゆうぜん然ぜんと驟しゅうう雨うを下して、万石の汗血を洗い去りぬ。蒸し暑むしあつき雑草地を払いて雨ようやく晴れたり。土は一種の掬きくすべき香においを吐はきて、緑葉の雫しずく々、海風日没を吹ふきて涼気秋のごとし。

へいげんゆうへこの夕ゆうまた愛妾ひたぬを携たえて門前かどまへに出でぬ。出でて快たげに新開地しんかいちを歩あみ行けば、松まつの木蔭かげに雨宿りして、唯濡ひたぬれに濡ぬれたる一個の貧翁ひんわうあり。

多くの草刈なかま夥間ゆうだちは狼ろう狽ばいして、蟻あのごとく走り去りしに、渠かれ一人老体の疲労劇はげしく、足踰よろほ踰ほいて避よけ得えざりしなり。竜動ろんどんの月と日本のあだ花と、相並あびて我わが面前まへに來きたるを見て、老夫あわただは慌ひしく跪ひざまずき、

「御時計は、はあ、どこにもござりましねえ。」

幾多の艱難かんなんの無功むこうに属ぞくしたるを追想おして、老夫おは漫そぞろに涙なみだぐみぬ。

美人びじんは流眊しりめにかけて、

「ほんとに御苦労だったねえ。」と冷かに笑う。

へいげんは哄然大笑して、

「日本人の馬鹿！」

と謂い棄てつ、おもむろに歩を移して浜辺に到れば、一碧千里烟帆山に映じて縹渺画のごとし。

へいげん美人の肩を拊ちて、

「人間は馬鹿な国だが、景色の好いのは不思議さ。」

と英語をもつて囁きたり。

洋妾はへいげんの腕に縋りつつ、

「旦那もう帰ろうじやございませんか。薄暗くなりましたから。」

「うむ、そろそろ帰ろうか。あの門外の鬱陶しい草には弱つたが、今ではさっぱりして

好い心持だ。」

「ですけれども、あの人足輩はどんな気持でしょうね。」

「やっぱり時計が見着からないのだと想つて、落胆しているだろうさ。」

「貴下はほんとに智者でいらつしやるよ。百人足らずの人足を、無銭で役つてさ。」

「腰弁当でやって来るには感心したよ。」

「ほんとにねえ。あのまあ蛇のいそうな草原を綺麗に撈らして、高見で見物なんざ太閤様も跣足ですよ。」

「そうかの。いや、そうあろう。実は自分ながら感心した。」

と揚々として頤髯搔い撫ずれば、美人はひたすら媚を献じ、

「ねえ貴下、私はなんの因果で弱小な土地に生れたんでしよう。もうもうほんとに愛想が尽きたんですよ。」

へいげんは頷きて、

「そうありたい事だ。こういつちや卿の前だが、実に日本人は馬鹿さな。しかしあんまり不便だ。せめて一件の金時計を蔭ながら拝ましてやろうか。」

と衣兜を探りて、金光燦爛たる時計を出だし、恭しく隻手に捧げて遙に新開地に向い、
 陋み嘲けるごとき音调にて、

「そらこれだ、これだ。」

途端に絶叫の声あり、

「あれえ！」

と見れば美人は仰のげ様にまろ転び、緑髪は砂に塗まみれて白き踵かかとは天に朝せり。
太いたく喫驚いたせるへいげんは更に驚きぬ、手中の金時計はすでに亡なし。

中

「おい大助。」

卒然従者を顧みて立たち住とどまれる少年は、へいげん等を去ること数十歩ばかり後うしろの方かたにありて、浪打際を散歩せるなり。父は小坪に柴さい門もんを閉じ、城市の喧けん塵じんを避けて、多しば日らく浩然の気を養う何なに某がしとかやいえる子爵なり。その児こ三郎と年とし紀十七、才名同族を圧して、後来多望の麟きりん児じなり。

随したがうわか壮かも伎のは南海の健児栗山大助。

「若様何でございます。」

「我われが謂いつた通り、金時計は虚言うそだ。」

その声すでに怒いかりを帯びたり。

「どうしてお解りになりました。」

「今二人で饒舌つてたろう。」

「私には解りませんが、しきりに饒舌つておりましたな。」

「うむ、解るまいと思つて人の聞くのも憚からず、英語ですつかり白状した。つまり百円を餌にして皆を釣つたのだ。遺失たもないものだ、時計は現在持っている。汝も我の謂うことを肯かんで草刈をやろうものなら、やつぱり日本人の馬鹿になるのだ。」

血氣勃勃たる大助は、かくと聞くより扼腕して突立つ時、擦違う者あり、横合よりはたと少年に抵触る。啊呀という間に遁げて一間ばかり隔りぬ。

「掏摸だ！」

三郎が声と共に大助は身を躍らして、むずと曲者の頸髪執つて曳僵し、微塵になれと頭上を乱打す。

「手暴くするな。」

と少年は大助を制して、更に極めて温和なる調子にて、

「おい盗つたろう。」

掏摸は陳じ得ず、低頭して罪を謝し、抜取りたる懐中物を恐る恐る捧げて踞まりつ、

「どうぞお見逃しを願います。」

少年は打笑いつつ、

「何、突出しやせん。汝はなかなか熟練たものだ。」

「飛んだことをおつしやいます。」

「いやその手腕を見込んで、ちつと依頼があるのだ。」

大助は愕然として若様の面を瞻りぬ。

「この懐中物もやろう。もつと欲くばもつと遣ろう。依頼というのは、そらあすこへ行、

あの、な、」

とへいげんを指して、

「彼奴の持つている時計を掏つてくれんか。」

その意を得ざる拘摸は、ただへいへいと応うるのみ。

大助は驚きて、

「ええ、若様滅相な。」

「いや少し了簡があるのだ。」

拘摸は事も無げに頷きて、

「じゃあの金時計ですね。」

「汝知つてるのか。」

「そりやちやんと睨にらんであります。あんな品は盗つても、売るのに六ヶしいから見逃みがして置くものの、盗ろうと思やお茶の子でさあ。」

「いや太ふて々しい野郎だなあ。」

と大助は呆然たり。

「汝も聞いたろう、あの長谷の草刈騒動さわぎを。」

「知つてる段ですか。」

三郎は告ぐるに実をもつてすれば、

「へえあの毛唐が！」

と掏摸たうもだになお憤慨の色を表わせり。

「若様此奴こいつは離すと、直じきに逃げてしまいますよ。」

「こう、情無いことを謂いなさんな。私わっちやこんなものでもね、日本が大の鼻屑ひいきさ。何の赤あ髯かひげ、糞くらでも喰くえだ。ええその金時計は直すくに強奪ひつたくって持って来やす。」

かかりし後、へいげんはその簪かんざしの花を汚けがされ、あまつさえ掌中の珠を奪われたるなり。

下

三郎は掏摸の奪いたりし金時計を懐にしつ、健児大助を従えて、その夕月下にへいげんの門を敲きぬ。

誰何せる門衛に、我は小坪の某なり、約束の時計を得たれば、あえて主公に呈らせんと来意を告げ、応接室に入るに際して、執事は大助を見て三郎に向い、

「時計を御拾得の方は貴下ですな。この方は何用でいらつしやいました。」

三郎いまだ答えざるに、大助は破鐘声を揚げて、

「俺あ下男だ。若様の随伴をして来たのだ。」

「そんなら供待でお控えなさい。」

と叱るごとく窘めたり。大助は団栗眼を睜きて、

「汝達の指図は承けねえ。さあ若様御一所に入りましょう。」

執事はこれを遮りて、

「いいえなりません。応接室へは、用事のある客の外は、一切他人を入れませんのが、当家の家風でございます。」

へいげんは金時計を失いて、たちまち散策の興覚め、すごすご家に帰りて、燈下に愛妾と額を鳩めつつ、その失策を悔い且つ悲しみ、怏々として楽まざりし。しかるに突然珍客ありて、告ぐるに金時計を還さん事をもつてせり。へいげんは快然愁眉を開きしが、省みれば衷に疚しきところ無きにあらず。もし彼にして懸賞金百円を請求せんか。我にあらかじめ約あれば駟も及ばず、今はたこれをいかんせむ。

身を一室に潜めて、まずその来客を窺えば、料らざりき紅顔の可憐児、二十歳に満たざる美少年ならんとは。這奴、小冠者何程の事あらん。さはあれ従者に勇士の相あり。手足皆鉄、腕力想うべしと、へいげん漫に舌を捲き、すなわち執事をして大助を遠ざけしめむとしたるなり。

大助は敵の我を忌むを識りて、小主公の安否心許なく、なお推返して言わんとするを、三郎は遮りて、

「宜しい彼室で待つてな。」

「だつて若様。」

「可いよ。」

と眼もて語れば、大助は強うるを得ず、

「ええ、どこで待つのだ。案内しろ。」

「静しずかにせんか、何という物言いだ。」

と三郎は警いましめぬ。

執事は大助を彼方あなたの一室ひとまへ案内し、はたと閉ざして立去りける跡に、大助は多時しばらく無事に苦くるしみつ、どうどうとしこを踏みて四壁を動かし、獅子のごとき力声を発いして、満腔の鋭氣を洩もらしながら、なお徒然に堪えざりけり。

応接室にては三郎へいげんと卓テエブル子を隔てて相對し、談判今や正たけなわに闌ななり。洋ランヤメン妾めも傍かたえに侍したり。渠かれは得々としてへいげんの英語を通弁す。

この時三郎を軽んずるごとく、

「一体貴下は何御用でお出でなすつたのです。拾った物なら素直に返して、さつさとお帰りなすつたら可いじやございませんか。」

「お黙んなさい。時計と交ひきかえ換にお礼の百円を戴きに來ました。」

「品物を拾つて、それを返すのに礼金を与れと、そちらからおっしゃる法はございますまい。」

「いえ、普通ただ拾つて徳義上御返し申すのなら、下さるたつて戴きません。しかし今度のは

——こう謂つちや陋さもしい様ですが——礼金が欲しさに働きましたので、表おもてむき面めんはともかく、謂わば貴下に雇われたも同おなじでございます。それに承れば、何か貧乏人を賑にぎわすという様な、難ありがた有い思おぼしめし召めいから出た事だと申しますが。」

と弁舌流るるごとく、滔とうとう々として論じ来るに、へいげん等はこは案外とおもえる様さまにて、

「それじや御持参の時計を拝見いたしましたしょう。」

「これです。」と懐より時計を出だして指さし示しめせば、

「どれどれ。」と取らんとするをさはさせず、三郎は莞爾かんじとして、

「違ちがえば他ほかに遺失おとしぬし人を探します。貴下のなら百円下さいまし。」

彼方あなたもさる者詭弁きべんを構かまえて、

「あれとは違ちがいますが、やつぱり私わたくしの時計で、それは先刻さつき掏摸すりに盗とられた品だが。怪あやしからん、どこでお拾すいなすつた。」と暴あらかに詰なれば、三郎少しも騒さわがず、

「そんなら掏摸すりが遺失おとしたのでしよう。何しろ私は御門外の一町以内で拾すつて来きました。」

へいげんは大喝おほして、

「小僧こぞう、汝きこは掏摸すりだ。」

「そういう者が騙拐だ。」

「何を。」と眼を瞋して、はたと卓子を打てば、三郎は自若として、

「ちと仔細があつて、貴下が人は知るまいと思つている事を、私はよく知つております。

文明国の御方にも似合わない、名譽ということを御存じがありませんか。私はむしろ貴下の御為を思つて計らうのですが、どうぞございます。」

と朱唇大に気焰を吐けば、秘密のすでに露れたるに心着きて、一身の信用地に委せむことを恐るれども、守銭奴は意を決するあたわず。辞窮して、

「蒸暑い晩だ。」

とへいげんは窓に立寄りて海を望み、たちまち愕然として退りぬ。

「へいげん殺せツ。」

と叫ぶものあり。続いて起る呐喊の声。

月は中天にありて一条の金蛇波上に馳する処、ただ見る十数艘の漁船あり。篝を焚き、舷を鳴して、眼下近く漕ぎ寄せたり。こはこの風説早くも聞えて、赤髯奴の譎計に憤激せる草刈夥間が、三郎の吉左右を待つ間、示威運動を行うなり。大助これを見て地踏を踏みて狂喜し、欄干に片足懸けて半身を乗出だしつ。

「も一番やれ！」

と大音声に呼ばわれれば、舟なる壮佼声を揃えて、

「へいげん殺せ。」と絶叫す。

洋妾は耳を蔽いて卓子に俯し、へいげんは椅子に凭りて戦きぬ。

三郎は欣然として、

「日本人の馬鹿が、誑された口惜さに貴方を殺すという騒動です。はッはッ馬鹿な奴等だ。」

へいげんは色を失して、

「私、何を欺きました。」

「浜で御自分がおつしやつた言をお忘れですか。」

へいげんはあるいは呆れ、あるいは愕き、瞬もせで三郎の顔を瞻りたりしが、やや有りて首を低れて、

「決して欺きません、証拠がございます。」

顔色土のごとく恐怖せる洋妾を励まして、直ちに齎らしめたる金貨百円を、三

郎の前に差出せば、三郎は員を検してこれを納め、時計を返附して応接室を立出で、待

構えたる従者を呼べば、声に応じて大助猛然と顛れたり。

三郎は笑ましげに、

「これをみんなに分けてやれ。」

大助は金貨を捧げて、高く示威運動艦隊に示しつつ、

「衆見ろ、髻から取ったこの百円を、若様が大勢に分けてやるとおっしゃる。」

その声いまだ訖らざるに、どつと興る歓呼の声は天に轟き、狂喜の舞は浪を揚げて、船も覆らむずばかりなりし。

明治二十六年（一八九三）六月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成1」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年8月22日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第一巻」岩波書店

1942（昭和17）年7月30日第1刷発行

初出：「侠黒兒」少年文學、博文館

1893（明治26）年6月28日

※初出は尾崎紅葉「侠黒兒」の附録です。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5186）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：清角克由

2014年8月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

金時計

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>